



「ICT が実現する未来世界」 を映す窓

監事 正村達郎

今、子供たちの理科離れや大学での電子情報通信分野の学科の不人気が心配されています。かつての生き物係や虫博士やラジオ少年は理科が好きで、大学で電子情報通信を勉強し、ICT がすべての社会の基盤であり、その世界にかかわることが当然のように社会に出たものです。私たちが明るい未来を作るのだという夢がありました。今、そのような目標が失われてしまったのでしょうか？

最近、スピルバーグ監督が作ったマイノリティ・レポートという 2002 年に公開された映画の Making DVD を見ました。2054 年の未来を描いた SF ですが、スピルバーグは「50 年先の未来は予測可能。多くの科学者や技術者、専門家の知恵を結集して綿密に企画した。」と語っています。サスペンス映画なので、残念ながら暗い面が強調されていますが、まさに 50 年後の ICT 技術、ユビキタス社会が見事に描かれています。ジュスチャ・コンピューティングや 3D 映像、至る所に設置された網膜スキャンが個人を認証し、個人あてに様々な情報や広告が配信され、車はガソリンではなく電気で走り、磁気を使ったマグ＝レブという新しい交通システム、スパイダーという三本足のマイクロロボットが複数集まって協調作業を行う様は、コンピューティング技術、セキュリティやコンシェルジュサービス、電気自動車や ITS、ユビキタスロボット技術の将来の方向を示しています。

10 年ほどたち、少し未来に近づいた今、描かれた技術の一部は手に入りつつあり、改めて彼らの企画力に驚かされます。ハリウッド映画のスクリーンは、まさに未来の姿を見せてくれる窓です。電子情報通信学会には、彼らに負けないような未来技術を映す窓になってほしいと思います。その窓に未来へ向けたビジョンを映して、それを皆で共有することが求められています。ビジョンとは実現する世界や目標を示し、それを具現化する技術のロードマップを作ることです。

今、世界経済は非常に厳しい環境にあり、企業、特に電子情報通信関係の物作り企業は大変苦しい状況にあります。日本の国際競争力が問われているにもかかわらず、売上げが伸びない中、支出を削って小さくなって耐えています。真っ先に削るのが残念ながら、研究開発投資。このような環境で企業の学会活動が低調になるのも仕方がないのかもしれませんが、しかし、このような状況だからこそ、本会が果たすべき重要な使命があります。それは、世界レベルの研究、技術の方向を映す窓になることです。個々の企業が自分の窓を減らさざるを得ない状況では、学会の中にあるたくさんの窓が大変役に立ちます。

良い窓になるために、第 1 に重要なことは「窓」を広げ、かつ、遠くを見えるようにすることです。広角レンズだけで見ていると目標を見つけることができません。望遠レンズだけで見ていると正しい方向を見失います。広角レンズと望遠レンズの両方を兼ね備えたズームレンズの目を持つことが重要です。

次に重要なことはたくさんの窓を開けることです。一人一人が持つ窓の広さは限られていますが、いろいろな形、いろいろな方向を向いている、大小様々な窓を通して景色を見れば新たな発見につながります。たくさんの「のぞき窓」は有機的につながることによって、役に立つ「窓」になっていくのです。つまり「窓」の連携です。

たくさんの「窓」を磨いて、更に、それらをつなぎ合わせて、広い視野を持った、遠くを見通せる「窓」を皆で作って、未来の明るい世界を描き、それを実現するための様々な技術を追求し続けたいものです。